

【一】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みを、ひらがなで答えなさい。なお、答えは、ていねいに書くこと。

- ① 著しい効果が期待できる。
- ② 彼はキンコツたくましい。
- ③ ここからはハンごとの行動です。
- ④ 森の中をサンサクした。
- ⑤ 今日の日がクれていく。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間の本質は、「欲望」が単なる欲望ではなく「自我（自己）の欲望」であるという点にあります。「自己という欲望」であること、これが人間の本質です。すでに触れましたが、動物の欲望は、大雑把おおざっぱに言って「身体の欲望」です。たいていは空腹や性欲やら寒暖をしのぐことがその内実です。人間の「欲望」の中心は、そういった「身体の欲望」をはるかに超えて、なにより¹「自己価値」への欲望なのです。

子どものころは、人間の「自己」はひたすら可愛がられること、愛されることをめざしますが、だんだん、他人から認められること、評価されることを求めるようになります。青年期は「自我」あるいは「自己意識」の絶頂期ですから、「自己価値」が何より重要になる。そして「自己価値」とは、他人から立派な存在として認められるという承認の欲望です。だから、はじめから「オレは立派な人間よりもお金持ちになりたい」と思う若者はほとんどいません。そんなことを言う人がいたとしても、社会的に立派な仕事をしてみながら評価されるという第一位の能力に見切りをつけて、金持ちになれそうだと思い、先手を打って自分はそっちのほうがいい、と言っているのです。

べつに立派な人間にならなくても、「幸福」きょうふ（生活の享受）を得られれば人生としても人間としてもよいのだ、という一種の知恵がやってくるのは、青年期の過激な「自己意識」の時期を通った後であって、はじめにそういう考えを抱く理由は人間にはありません。

青年期の人間は、いわば「自己意識のオバケ」³です。自分を絶対の自己として認めたいし、認められたい。でも、誰でもこの世界の絶対的な主人公たろうとする可能性に少しずつ挫折し、可能な範囲で、人から認められたり愛されたりすることで生きていける、ということを知ってゆくわけです。つまり青年は、典型的には、まずは立派な人間、よい人間になりたいと熱望し、つぎに徐々にそれをなだめて、「日々の可能性があれば生きてゆける」²ことを受け容れてゆくようになるのです。

日々の可能性とは、自分のもっている小さな人間関係の世界で、認められたり愛されたりすることです。そのような意味で、

人間は誰も、その人なりの「承認ゲーム」の空間の中を生きていると言えます。

人は、あるところから「親子関係」より「友人関係」のほうが重要な意味をもつようになります。つまり、親に認められなくても、友人には認められたいと思うようになる。親にはいつも叱られているし、それでも、こいつはまずこんなヤツだという基礎的な承認関係は壊れません。しかし友人からの評価が大きく下落することは大問題です。

そういう意味で、子どもが親との関係からだんだん離れて、友人関係のほうが大事になっていくのは自然なことです。友人や知人、つまり親しい他者は、承認ゲームの相方だという意味で人間にとって不可欠な存在なのです。

^{注1} サルトルはこんな面白い言い方をしています。

⁵ 「他者の視線は無を分泌する」

これはどういうことでしょうか。他者の目は、人間に「無」、つまり否定性を意識させる、言い換えれば、他者の視線だけが私たちを「対象化する」ということです。

人間は、自分の外部のどんな対象に対しても、それらを一方的に「対象化」することができます。さまざまな事物は、人間にとって、有用なもの、必要なもの、有害なもの、無意味なもの等々です。ここでは人間が一方的に事物を対象化しています。つまりあくまで人間が自分の観点から、その対象が「何であるか」を規定している。ところが、唯一「他者」という存在だけが例外です。なぜなら他者は「視線」をもっているからです。この他人の視線だけは、反対に「私」を対象化するものだからです。他者の視線にさらされると、私たちはどこか緊張し、ぎこちなくなり、不自由な感じをもちます。その理由は、他者の視線が私たちを対象化し、そして「価値評価」するからです。

人間の不安の源泉は、極端に言うところでは二つです。

・「他者の視線」、そして「死」です。死は私たちの存在の可能性それ自身を脅かします。そして「他者の視線」は、私たちの「自己価値」を脅かすのです。人間の欲望の中心は「自己価値」の確保ですが、世の中で他者という存在だけが、私たちの「自己価値」を脅かす存在です。だから「他者の視線は無を分泌する」、と言われるのです。

しかし、一方で逆のことも言えます。すなわち、他者だけが、私たちの「自己価値」の認定者たりえます。

他者の承認なしに自己価値をつかもうとする空しい試みについては、「自己意識の自由」のところでも示しましたが、若者が例外なくこの試みの中に入り込むのは、思春期や青年期が「自己意識のオバケ」にとりつかれている時期なのに、他者からよい評価を得ることはそう簡単ではないからです。

ともあれ、そういうわけで「自己」とは一つの欲望、「自己欲望」つまり、自己価値の承認への欲望であると言えます。しかし、ここで少し別の観点から考えてみましょう。いったい「自己」の内実(中身)とは何でしょうか。

ふつう、人間を評価する上で、社会的地位が最も代表的で一般的なものです。しかし、それは社会というゲームでの成功・不成功(勝ち負け)の尺度だということを、だれでも知っている。だから人は、人間の社会的な存在価値と、人となり(人格や人間性)をそれなりに区別して考えています。では、このような意味での人間の中身、「人格」や「人間性」といったものの内実をどう考えればよいでしょうか。哲学では、これを自己の「内的ルール」(＝自己ルール)として考えます。

すでに見てきたように、自己ルールとは、つまり、「真偽」「善悪」「美醜」についての内的な規範(ルール)のことです。これらは哲学的には「真・善・美」という概念にあたりますが、人間の「人間性」、すなわち人間の内的価値の基準は、大きくは、この「真・善・美」ということでしか測れません。この「真・善・美」のルールについて少し哲学的に説明してみよう。

まず、「A」のルールから考えてみます。「A」のルールの原型は「よいーわるい」のルールです。前に、お母さんと子どもの間の「禁止」とその約束を守ることについて話しました。幼児はどこかの時点で「泣かないでがまんすること」を覚え、また「言いつけを守る」ことを受け容れていきます。そのことで直接的な「身体のエロス」をがまんして、母親との「関係のエロス」をつかんでゆくのです。

「よいーわるい」は人間的な価値の基本秩序ですが、この源泉は、母親との「禁止」や「約束」を守ることです。それを守ることは「よいこと」であり、守ることができる自分は「よい子」になる。直接的な「身体のエロス」を放棄して、「関係のエロス」を作り出すとすること、これが「よい」という価値の意味です。

「美醜」（きれい—きたない）のルールはいわば感受性のルールで、きわめて身体的なものと見えますが、じつは文化や環境の中で形成されるものです。これは、狼に育てられたとされる少年の事例『アヴェロンの野生児』などを讀むと、如実に理解できます。この少年ヴィクトールは、はじめは衣服を身につけるのを嫌がり、ほとんど裸に近い状態で冬の野外に出るのを好みしました。またうんと熱いものを素手でもつても平気な様子でした。しかし、風呂に入って清潔にすることに少しずつ慣れると、だんだん一般の人間のように寒がったり、暑がったりするようになるのです。B 的な感受性が C 的な体制であることがよく分かります。

彼はしかし、音楽や美しい絵などには一切興味を示すようにはなりませんでした。つまり、「きれい—きたない」についてのルールが形成されなかったのです。これを欠くと人は憧れやロマン性を形成できない。憧れやロマンは、ロマンティズムやセンチメンタリズム、ノスタルジーなど、基本的な人間的感情の源泉です。その結果は重大で、人はたとえば、恋愛や同情などの感情をもてないし、また C 的な対象、音楽や絵画、物語などへの感受性も形成されません。

もう一つの「D」（ほんとう—いつわり）のルール。これは、いちばん微妙で説明しにくいものですが、まずこれはいわゆる「真偽」ということ、客観的な意味での真実と虚偽ということではなく、内的な「ほんとうと虚偽」についてのルールを意味します。

たとえば、一般的には嘘をつくことは「悪い」ことです。しかし、具体的なケースでは、この一般ルールは必ずしもあてはまらず、そのつど人間は、どう行動したり決意したりすべきかを考えなくてはいけない場面があります。たとえば、友だちを守るために親や先生に嘘をつかないといけないときがある。また、職業上のモラルと自分のモラルとが食い違つて、どちらを優先するかといったこともあります。そういう場面では、単に嘘は悪いといった一般ルールは通用せず、そのつど自分でどれをとるかを決断しないといけない。

要するに、人間の欲望もルールも多数性を持ち、そのつどどれを選ぶかという場面に直面するし、そのとき簡単に答えが出ずあれこれ悩むのが、「自己」というものの本性です。そして、自分の決断や決定について、周りからあれこれ非難を受けるかも

しれないが、でも自分としては自分の判断を肯定し、是認できるという感覚にこだわること、これが自己ルールとしての「ほんとう—虚偽」のありようです。

「良心」というのは、つまり自分の決断が、自分自身にとつて納得できるかどうかについてのいわば「内心の声」のことです。自分の「ほんとう」のルールが確立している人は、自分を投げていない人、自分を信頼できる人だと言えます。

さて、これが人間の「自己」の内実です。「自己」とは、「よい・美しい・ほんとう」についての内的な自己ルールからなっている。このルールが確立している人は、しっかりした自己価値を持ち、人や社会の一般的評価にそれほど左右されない。自分の生き方をもっており、人間関係をうまく作っていく能力を身につけています。大事なものは、こういう人は必ずしも社会的なゲームで大きな成功をつかまなくても、それなりに自分の生き方を納得し、肯定して生きていけるということです。

逆に、自己ルールがしっかり形成されていない人は、他者や世間の視線が過剰に気になるし、「自分」の判断に自信がなく不安が多い。このためしばしば「ほんとうの自分」というイメージを追うことになります。

また、ときに、根拠なく自信過剰な自己ルールを持ち、他者の評価を全くうけつけないような人もいますが、そういう人はただ独善的だけです。彼らは他人とのルール関係を調整していく力をもたないので、権力をもとうとすることが多いのです。

このように、「自己」というものは「真の自己」があつて、それを発見するといったものではなく、各自が適切な仕方で作riあげる以外にないものです。

（竹田青嗣『愚か者の哲学 愛せない場合は通り過ぎよ』）

※問題作成の都合上、文章中の小見出し等を省略したり、字体を変更したりしたところがあります。

注1 サルトル……フランスの哲学者・小説家・劇作家。

注2 エロス……ここでは、欲望のこと。

注3 ロマンティズム……現実を離れ、夢や空想にひたること。

注4 センチメンタリズム……感情的・感傷的になること。

注5 ノスタルジー……故郷や過去を懐かしむ気持ち。

注6 モラル……道徳。

問一 ―線1「自己価値」への欲望」とありますが、これを説明している部分を問題文中より二十五字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問二 ―線2「はじめにそういう考えを抱く理由は人間にはありません」と筆者は述べていますが、なぜそのように言えるのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人それぞれ考え方は異なり、「幸福」と感じる内容も当然それぞれ違いがあるため、「お金持ちになること」だけが誰もが考える幸せであるとは言えないものだから。

イ 人は幼少期から青年期を経て大人へ成長するものであり、まずは社会的な評価を得てから立派な、よい人間になりたいと思うのがほぼ自然だと言えるものだから。

ウ 人は誰しも立派な、よい人間になりたいと望むわけではなく、社会的に一定の評価を得た人間だけがそのようなになりたいと考え、大人へと成長するものだから。

エ 人は成長段階で基本的に「自己意識」の絶頂期とも言える青年期を迎え、立派な、よい人間になりたいと望んだ後に様々な挫折等を経験し、成長するものだから。

問三 ―線3「自己意識のオバケ」とありますが、これはどのような存在ですか。解答らんに合うように問題文中より十六字以上二十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四 ―線4「人は、あるところから〜もつようになります」と筆者は述べていますが、なぜそのように言えるのですか。その理由として適当な部分を解答らんに合うように問題文中より十六字以上二十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 ―線5「他者の視線は無^いを分泌^{ぶんぶん}する」とありますが、このサルトルの言葉を筆者はどのように解釈していますか。
次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者の視線によって、私たちは動物は持たない人間的な感情を失うようになる。
イ 他者の視線によって、時に私たちは自己というものを認める感覚を持てなくなる。
ウ 他者の視線によって、私たちは緊張してしまい、普段通りに行動できなくなる。
エ 他者の視線によって、日々私たちは自尊心というものを大いにくすぐられる。

問六 ―線6「自己」の内実(中身)」とありますが、これを言いかえた部分を問題文中より二十六字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問七 A D に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 偽 イ 真 ウ 善 エ 美 オ 身体 カ 自然 キ 職業 ク 文化

問八 ―線7「自己」というものはくはないものです」とありますが、ここでの筆者の主張はどういうものですか。問題文全体をふまえて、三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

家具会社に勤める森山健吾^{けんご}は、小学生サッカークラブチーム「月見野S.C」^{つきみのサッカークラブ}でコーチをしている。会社の業績悪化をきっかけに、コーチを辞めることを決意したが、クラブ代表から後任のコーチを連れて来てくれと頼まれる。そんな中、健吾と妻の晶子^{あきこ}は、息子の墓参りをした時、生きていれば二十歳くらいになっていた息子と同年代の若者を見かける。ある日、健吾は、その若者が月見野S.Cの練習を見学していることに気づく。サッカー経験者らしいその若者に親近感を覚え、クラブの指導を手伝わないかと声をかけたが、若者は、何も答えずに立ち去ってしまった。健吾は、その後、他のコーチから若者が月見野S.Cの試合を見に来ていたことを教えられた。

夕方近く、晶子が帰ってくるなり、「いたよ」と声をかけてきた。健吾はテレビで録画したサッカーの試合を観戦していた。
「いたって、だれが?」

「だれがつて、あの子に決まってるじゃない」
晶子は例の若い男らしき人物を、月見川^{つきみがわ}の河川敷^{かせんじき}で見たという。
「なにしてた?」

「それがね、サッカーしてた。子供たちと一緒に」
晶子はおかしそうに目尻^{めじり}を下げた。
「子供たち?」

「そう、四、五人集まってたかな。近くまで行こうかと思ったけど、さすがにそれはやめといた。でも、たぶんあの子だよ」
晶子はスーパーの袋を両手に提げ^さたま言った。
「ちよっとおれ、見てくるわ」

健吾はそそくさとソファ^Xーから立ち上がった。

「学校のあるほうの河川敷だからね」

その声を背中で聞きながら、サンダルをつつかけて家を出た。

自転車のペダルをこぎ、国道を東へ急ぎ、晶子が彼を見たという十六夜橋^{いざよい}へ向かった。それが本当にあいつなのか、たしかめなかった。

健吾はサンダルの右足を十六夜橋の欄干^{らんかん}にかけて、川原に視線を送った。田植えのすんだ緑の海原の右手に空き地がある。その赤土がむき出しになった場所に、子供たちの姿があり、一緒に大人がいた。Tシャツに赤いラインの入ったジャージのパンツをはいていた。たしかにあの若者だった。

みんなで試合をしているように見えた。ただ、地面には白いラインも引かれていなければ、ゴールもない。整備された公園でもなく、ただの休耕地なので、地面は凸凹^{でこぼこ}のはずだ。それでも彼らは楽しそうにボールを追いかけていた。大きい子も小さい子も一緒にサッカードをしている。

若い男はドリブルしながら、ボールを前後の足で挟んで踵^{かかと}で蹴り上げた。ヒールリフトという難易度の高い抜き技だ。子供たちは喚声^{かんせい}を上げ、男のあとを追いかける。すると今度はわざとボールを失い、一番小柄な子にボールを渡した。そうかと思うと再びボールを奪い、トリッキーな技を披露^{ひろう}してみせた。かなりのテクニクの持ち主だ。

しかし驚いたのは、それだけではなかった。

「どういことだよ」

思わず健吾はつぶやいた。

ボールを追う子供たちのなかに、午前中の練習を休んだ俊作^{しゆんさく}の姿があった。それに達樹^{たつき}もいるではないか。「あいつら……」俊作と達樹のほかは低学年の子が三人。そのせいか、ふたりどものびのびとサッカードをしている。ドリブルで仕掛け、奪われても再び奪い返してみせた。達樹は、若い男とまるで兄弟みたいに、親しげに話す場面もあった。

やがて日が傾き^{かたむ}、田んぼの蛙^{かえる}が鳴き始め、低学年の子供たちが帰っていった。俊作と達樹は残り、三人で三角パスを始めた。クラブの練習には参加せず、こんなところでサッカードをやっている。いったいどういづもりなんだ。

最初は腹が立ったが、そのことが意味することを健吾は考えた。単純に言えば、こっちのサッカードのほうが楽しい、ということではないのか。

俊作はサッカードをやめたいわけではない。そのことは見ていればわかった。達樹にしてもそうだ。あんなに楽しそうに、太ったからだを揺すりながら、自分からボールを追いかけている。彼らはサッカードをやらされているのではなく、やっているのだ。

河川敷¹の田んぼに、首の長い白い鳥が舞い降りた。水のなかをついばんでいる。どこからかもう一羽やってきた。

仲間に入れてもらおうか。

ふと、健吾はそう思ったが、サンダルで欄干を蹴って自転車をUターンさせた。

ペダルをこぎながら、虚しさ^{むなさ}が胸の内に膨らんでいった。自分がとてもZ^Yな気がした。

これまでやってきたことはなんだったんだ。十年コーチをやってきた、というけれど、めぼしい結果も出せず、クラブは衰退の一途をたどっている。そして今まさに、自分が率いるチームの子供とコーチがクラブを離れようとしている。

コーチをやめると決めたとき、子供たちにサッカードの楽しさを少しは伝えることができた与自己満足していた。感謝の言葉だけを報酬^{ほうしゅう}に、自分なりに精一杯やったのだと納得さえした。ツカ^{注1}さんの言葉は好きではない癖^{くせ}に、所詮^{しよせん}自分はボランティアなのだと、心のどこかで言い訳していたのかもしれない。親との距離をとり、考えの異なるコーチとの衝突を避け、自分なるべく抑え^{おさ}、波風を立てないように続けてきた。

なんだよ、それ。

会社での自分と同じじゃないか。

もっと自分には、できることがあったんじゃないか。やりたいことがあったんじゃないか。不意にそう思えてきた。

「どうした、会えたの？」

家に帰ると、晶子が言った。やけにうれしそうな表情だ。^B

「たしかに、あいつだったよ」と健吾は答えた。

「話せた？」

「いや、会いはしなかった。一緒にいたのは、月見野SCの子だ。おれが担当している学年の子だよ。今日練習を休んだくせに、² 楽しそうにサッカーしてやがった」

「よかったじゃない」と晶子は明るい声で言った。

「なにがいいんだよ」

「だって楽しそうにサッカーやってたんでしょ。それでいいじゃない」

「おまえに、なにがわかる」

健吾は思わず言い返した。

「どうしたの？ なに怒ってるの」

晶子はキッチンにもどって夕飯の支度を再開した。

自分でもなぜこんなに苛立^{いらだ}っているのかわからなかった。それは少なくとも妻にはない。妻の軽口がきつかけだとしても、怒りの本質はもっと別なところにある。そのことはわかっていた。³

健吾は爆発しそうな感情をなんとか抑え込もうとした。ゆっくりとまわりから水をかけるようにして、怒りの種火を鎮めていった。

キッチンから温かな料理のにおいが漂^{たな}ってきた。

「ちよつと疲れてるんだ」

健吾はだれにもなく言って、足元にまとわりついてきた猫のチャコを足の甲で遠ざけた。その言葉は嘘ではなかった。最近、寝付きが悪く、熟睡することができない。会社のこともあり、日曜日の夜が近づくにつれ、気分は憂鬱^{ゆううつ}になる。休日を心から楽

しめなくなった。

夕飯の間中、晶子は口をきかなかった。健吾も黙り込んだまま、箸^{はし}を動かした。料理を口に運んでは、テーブルの一点を見つめ、咀嚼^{そしゃく}をくり返す。好物の豚のしょうが焼きがやわらかく、味付けも絶妙だったけれど、誉め^ほめたりはしなかった。ご飯をおかわりしようか迷ったが、それもやめておいた。

早めに食事を切り上げ、わざとらしく大きなため息をつき、「出かける」とだけ言い残して家を出た。なにか目的があったわけじゃない。少し頭を冷やしたかっただけだ。^{注2}「憩い」へでも行こうかと思ったが、あいにく財布を忘れた。足は自然と学校のグラウンドへ向かった。

ゆるやかな通学路の坂道をのぼりながら、川のほうを眺めた。すっかり日が落ちて、さっきまで俊作たちがサッカーをしていた河川敷は闇に溶けている。蛙の聲がひとつの塊^{かたまり}となって、暗闇から立ちのぼってきた。水のおいを含んだ風が少し冷たい。小学校の校門は閉ざされ、駐車場には一台も車は停^とまっていなかった。とくに用事があるわけでもないのに、ひとまわりして帰るつもりだった。

校庭のフェンス沿いを歩いていたら、「ボン」という大きな音がグラウンドの奥でした。立ち止まり、フェンス越しに覗いたけれど、木立が邪魔をしてよくわからない。しばらくすると、また「ボン」と鳴った。時刻は午後八時を過ぎている。小学生であるわけがない。こんな時刻に、不審者だろうか。

以前、コーチたちでつくった、塩ビのパイプで組み立てたミニゴールが壊されるという事件があった。中学生の仕業^{しわざ}じゃないかと噂^{うわさ}が立った。ここ最近、地元の中学校在荒れていると聞いている。勝手に小学校の校庭に入り込み、おもしろ半分ミニゴールを使ってサッカーに興じ、そのままゴールを片づけもせずに帰る連中もなかにはいるらしい。

その話を思い出し、健吾は来た道を引き返した。重たい鉄の門扉^{もんび}を自分が通れる分だけ開き、学校の敷地に入った。昇降口を照らす外灯に小さな羽虫が集まっている。

月見野SCの倉庫の前を通り、校舎から離れず、植栽に隠れるようにしてグラウンドの様子をうかがった。大勢集まっている

としたら、やっかいだ。下手に声をかけ刺激すれば、つまらない騒動が起きないとも限らない。ここは慎重にいくべきだ。
グラウンドの奥に動く影が見え、また、「ボン」という音がした。その向こうには白い棒が見えた。だれかがゴールに向かってボールを蹴っているのだ。「ボン」という音は、足がボールをとらえるときの音にちがいがなかった。

耳を澄ましたが話し声は聞こえない。走りまわる複数の足音も気配もなかった。

音が鳴るのに間隔があるのは、ボールがひとつしかなく、自分で蹴っては拾いに行っているせいだとわかった。ボールの空気がゆるく、鈍い大きな音になるのだろう。それにしても、かなりのキック力の持ち主だ。

しばらくして眼が闇になてきた。白いゴールポストから二十五メートルほど離れた位置に人影が見える。ひとりでボールを蹴っている。まるでフリーキックの練習でもするように。

その男は力を入れずに正確にボールを蹴ることができた。インステップキック、インフロントキック、押し出すようなインサイドキック。時折鋭く落ちる無回転ボールも蹴った。何度か連続してゴールのバーに命中して、ボールが男のいるほうへはね返った。子供の見本になる、シャープでしつかりした蹴り方だ。

もう少し近くで見たくなった健吾は場所を移動した。その気配を察知したのか、男が動きを止めた。ちょうどそのとき、雲に隠れていた月が顔を出し、男の顔に明かりが差した。おそらく向こうからもこちらが見えたであろう。目が合ったような気がした。

——また、あいつだ。

健吾は安堵しながらも、度重なる偶然に胸をざわつかせた。

なぜ彼は再びこのグラウンドに姿を現したのか。

わざわざ月見野SCの試合を観にいったのか。

物事には必ず理由があるはずだ。

若者は夕方まで俊作たちと川の近くの空き地でサッカーをし、それからここへやって来たと考えられる。あれから二時間近く

経過していた。その間、いったいなにをしていたのだろう。ずっとここでボールを蹴り続けていたのだろうか。

男は再びボールに向かって助走をつけ、均整のとれた美しいフォームでボールを蹴った。闇に放たれたボールは鈍い音を残して、三日月のようなカーブを描いてゴールネットに突き刺さった。その瞬間、彼は両手を挙げ、二つの指先を天に向けて微笑んだ。その顔は死人のように青白く、そして恍惚として、祈るように夜空を見上げていた。

男はそのままゴールに向かい、ネットに絡みついたボールを拾い上げた。近くに置いてあるリュックサックをつかむと、ゆつくりと歩き出した。どうやらさっきのゴールで終わりにしたらしい。

しかし、男のつま先が向いているのは校門ではなかった。あきらかにその二本の足は、ある地点を目指していた。彼の向かう先には、月明かりに照らされた健吾のひそむ植え込みがあった。

トレーニングシューズが砂を食む音が次第に近づいてきた。健吾は息を凝らしながら、彼の到着を静かに待った。

(はらだみずき『ムーンリバーズを忘れない』)

注1 ツカさんの言葉……月見野SCのコーチの一人である「ツカさん」は、普段から「私たちは所詮ボランティアだから」と口にし、できることとできないこととの区別をはっきりとつけていた。

注2 「憩い」……月見野SCのコーチたちがよく行く居酒屋。

注3 恍惚……うっとりとしている状態のこと。

問一 〓線X「そそくさと」・Y「めぼしい」の意味として、最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| X 「そそくさと」 | ア おだやかな様子で | イ とりみだした様子で |
| | ウ 落ち着かない様子で | エ こそこそした様子で |
| Y 「めぼしい」 | ア 特に目立った | イ おおげさな |
| | ウ 期待通りの | エ まちがいのない |

問二 Z に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|------|------|------|------|
| ア 無謀 | イ 無力 | ウ 無残 | エ 無茶 |
|------|------|------|------|

問三 〓線1「仲間に入れてもらおうか」とありますが、「健吾」がそのように思ったのはなぜですか。その説明として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子供たちとサッカーを楽しむことにおいては、自分も若者には負けなと思ったから。
- イ サッカーコーチとしての仕事を充実させるために、若者の技術を学びたいと思ったから。
- ウ 子供たちが無断で練習を休んだ理由を若者が知っているのではないかと思ったから。
- エ 子供たちと若者がとても楽しそうにサッカーをしているのをうらやましいと思ったから。

問四 〓線A「晶子はおかしそうに目尻を下げた」・B「やけにうれしそうな表情だ」とありますが、この部分から読みとれる「晶子」の説明として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 健吾が、偶然とはいえ親子ほども年の違う若者と関わりを持つとし、自分だけ楽しい思いをしていることをうらやんでいる。
- イ たまたま出会った若者のことが気になってしかたがなく、何とか若者と関わりを持つとうとしている健吾の姿を子供っぽいとからかっている。
- ウ 健吾が、偶然出会った若者とサッカーを通じて関わりを持つとうとしていることをほほえましく思い、健吾の反応が気になっている。
- エ たまたま関わりを持った若者とサッカーを通じて交流を深めることで、健吾がいきいきとしていることを喜ばしく思っている。

問五 〓線2「今日練習を〓してやがった」とありますが、「俊作」と「達樹」が、「若者」と一緒に「楽しそうにサッカーをし」ていた理由を「健吾」はどのように考えていますか。それがよく分かる一文を問題文中より抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問六 〓線3「怒りの本質」とありますが、「健吾」は、何に對して「怒り」を感じていると考えられますか。四十五字以上六十字以内で説明しなさい。

問七

——線4「好物の豚のしょうが焼きが、誉めたりはしなかった」とありますが、このときの「健吾」の説明として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 晶子に八つ当たりをして気まずい雰囲気^{かんいき}にしてしまったが、それをどうすることもできず、素直に自分の思いを口に出せずにいる。

イ 怒りの直接の原因ではないが、気落ちしている自分にくりかえし軽口^たを叩いた晶子の無神経さに腹が立ち、声をかける気になれずにいる。

ウ 思わず怒りをあらわにしてしまったことを強く後悔し、晶子を深く傷つけたのではないかと落ち込み、話しかけるのを恐れている。

エ 落ち込む自分をはげます為に自分の好物を作ってくれた晶子の優しさをありがたく思うが、恥ずかしくて感謝の言葉を言えずにいる。

問八

——線5「もう少し近くで場所を移動した」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 男の多様で高度なサッカーの技術を考えると、この男は夕方河川敷で見た若者にまちがいないと思い、その顔を確認しようと思ったから。

イ さまざまなボールの蹴り方を使い分ける、この男の高度なサッカーの技術に感心し、そのフォームなどをよく観察してみたいと思ったから。

ウ 夜の小学校に無断で入り込み、高度な技術を駆使してサッカーの練習をしているこの男を不審者だと思い、顔を覚えておこうと思ったから。

エ 鋭くしつかりしたボールの蹴り方をする男が、自分の後任のコーチとしてふさわしいかどうか、しつかり見極めようと思ったから。

問九

——線6「健吾は息を、静かに待った」とありますが、この時の「健吾」の説明として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若者が何度もサッカークラブの練習場に現れることを偶然とは思えない健吾は、この若者が不審者に違いないと判断し、自分のそばにやって来たらすぐにとりおさえてやろうと意気込んでいる。

イ 偶然の出会いをくりかえした若者にただならぬ運命を感じている健吾は、自分の後任のコーチとなるのは、子供たちと仲良くなったこの若者以外にいないと確信し、どう説得しようかと考えている。

ウ 若者と偶然の出会いをくりかえすうちに、強い関心を持つようになった健吾は、若者の意図をはかりかねて不安と緊張を感じつつも、この若者としつかり話ができるかもしれないと期待している。

エ 偶然をよそおって若者がサッカークラブの子供たちにサッカーを教えたことを感謝していた健吾は、勝手にグラウンドを使った若者を注意しようと思いつつも、きちんと話を聞いてやろうと決意している。

国語解答用紙

【二】

10

②×5

①

②

③

④

⑤

【三】

8

④×2

問二

初

終

20

⑤×4

問三

初

終

問四

初

終

問五

初

終

8

②×4

問七

A

B

C

D

問六

初

終

9

⑨×1

問八

45

35

【三】

4

②×2

問一

X

Y

3

③×1

問二

10

⑤×2

問三

3

③×1

問四

10

⑤×2

問五

15

⑤×3

問七

10

⑩×1

問六

45

60

問八

問九

【二】

10

【三】

45

【三】

45

総点

100

受験番号

氏名